

大 癡 見

能村 研三

籠居享楽

止め 椀 の 湯 葉 の 薄 味 春 の 宵

は くれ ん は 無 垢 の 憂 ひ を 裏 み を り

慎 み の 厄^え 病 み の 空 は よ な ぐ も り

寂 々 と 波 紋 の 果 て や 二 月 果 つ

つ つ 闇 の 幽 寂 に 置 く 納 め 雛

春 愁 の 籠 れ る 窓 は 嵌 め 殺 し

朝 羽 振 る 沖 波 を 聞 く 彼 岸 寺

捨 て 野 火 の ひ と 煽 り し て 起 ち あ が る

面 箱 の 中 は お ぼ ろ の 大 癡 見

暮 靄 と も 潮 ぐ も り と も 遠 干 潟

緊急事態宣言が出されて、私の生活も日常とは一変した。通勤の自粛で協会には行けず、定例の句会、カルチャー教室、また各種団体の定期総会など年度始めのあらゆる行事が中止となり公用で外出することは全て無くなった。こんな状態が一月以上続くなど私の人生の中でも初めての経験である。

しかし、俳人はこんな時こそボジティブになれる人種なのかも知れない。三月からの沖の例会は全て通信による紙上句会へと切り替わった。これを世話する幹事の人たちのご苦労は大変なものであるが、通常句会の参加者数をはるかに超え、いかに多くの沖人が俳句に渴望されていたかが判って嬉しくなった。勿論一つの場所で句座を共にする醍醐味はないものの、ここは我慢するしか外はない。

沖の編集も発行所分室、印刷所での出張校正など皆が集まって作業することを止め、辻美奈子編集長の指

揮のもと、それぞれ原稿を持ち帰って自宅ワークを余儀なくされている。いつもより時間がかかることになるが、雑誌の遅延になることにはご理解をいただきたい。業務部の誌代整理、発送準備も分室で作業は中止し今月は我が家で家族と共に封筒のシール貼りを行った。昔まだ沖の体制が整わない頃、家内作業でやっていたことが思い出され懐かしかった。

私の書齋での作業も何時になく予定が拂っている。新聞や雑誌の俳句の選はほぼ同じようなペースで来ているが、沖五十周年に向けて私の句集編集と「能村登四郎の百句」のまとめにも取り掛かる時間が出来た。

また三月に退院以降、リハビリを兼ねて一日の日課で一時間位家の近くを歩くことにしている。ほぼ4、5キロは歩くことにしているが、真間川沿いや真間山弘法寺や中山法華経寺など楽しく散策する箇所には事欠かない。

ただ十月に予定している沖の五十周年大会を延期せざるを得なくなったのが辛い。一日も早い収束を皆さんと共に祈りたい。

〔俳句〕五月号掲載作品

能村 研三